

あなたと 博物館

No. 249
2024.09.15

特集：松本市立博物館特別展
「和食 ー日本の自然、人々の知恵ー」

知ると、もっとおいしい。

特別展

和食

日本の自然、
人々の知恵
Special Exhibition
WASHOKU
Nature and Culture in Japanese Cuisine
ー More Delicious with More Knowledge ー



Matsumoto City Museum

松本市立博物館

2024.10.5 sat ▶ 12.8 sun

特別展
和 日本¹の自然、
 人々の知恵
 Special Exhibition
WASHOKU
 Nature and Culture in Japanese Cuisine
 – More Delicious with More Knowledge –
食

「和食」ってなんだろう？

本展は、令和5年10月に国立科学博物館でスタートし、松本が4番目の開催地となる全国巡回展です。

平成25年(2013)12月4日、「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。登録された正式な名称は、「和食；日本人の伝統的な食文化 — 正月を例として — 」といます。

ユネスコ無形文化遺産の登録申請にあたっては、「和食」の特徴として、

- ①日本の国土に根ざした多様な食材が新鮮なまま使用されている
- ②コメを中心とした栄養バランスに優れた食事構成となっている
- ③食事の場において「自然の美しさ」「季節の移ろい」が表現されている
- ④正月や田植え、収穫祭のような年中行事と密接に関連している

という4点を挙げ、和食を“食事という空間の中で「自然の尊重」という精神を表現している「社会的慣習」”^{※1}として提案しています。

つまり、ユネスコ無形文化遺産に登録された「和食」とは、「日本人の伝統的な食文化」のことであり、特定の料理や内容を定義しているのではなく、「自然の尊重」を基本とした、生産から消費までの過程における様々な技能や知識も含まれているのです。^{※2}

食文化を含めた和食は、日本の自然やそこに住む人々の知恵・歴史を背景に成立しました。南北に長く、多様な環境を持つ日本では、「地域に根差した食材」もそれぞれの地域で大きく異なり、各地域の食文化も非常にバラエティ豊かです。加えて、和食は外来の食文化を柔軟に受け入れつつ、独自に発展させることで成立しており、今なお変化を続けています。

本展では、食材の実物標本など自然史資料の他、再現料理模型や史資料等の展示を通して、日本の環境や人々の営みにより育まれてきた「和食」について紹介します。

※1 文化庁ホームページ

※2 江原綾子監修『教養としての和食 一食文化の歴史から現代の郷土料理まで』（山川出版社 2024）

第1章 「和食」とは？

人類は、生きることに欠かせない三大栄養素(糖質・タンパク質・脂質)を植物性と動物性の食材を組み合わせることで摂取してきました。その組み合わせは、土地固有の自然環境や文化によって特徴が異なります。

ここでは、植物性と動物性の食材の組み合わせを「食のパッケージ」と呼び、日本の「米と魚」を中心とする食の特色を、世界の「食のパッケージ」との比較から概観します。



コウジカビの顕微鏡拡大写真

第2章 列島が育む食材

日本列島は、南北に長く多様な環境があることから、世界有数の生物多様性が高い地域です。和食の特徴の一つである多様な食材は、このような生物の多様性によってもたらされています。

本章では、水・きのこ・山菜・野菜・魚介・海藻などの標本とともに、列島の自然と食とのかかわりを見ていきます。また、微生物の働きを巧みに利用して作り出された発酵の技術や和食に欠くことができない出汁についても紹介します。

第3章 和食の成り立ち

日本列島に人々が暮らすようになって以来、人々は自然環境や社会環境に影響を受けながら、日本ならではの食文化を形成してきました。

本章では、和食のルーツといえる縄文時代から、食を取り巻く環境とスタイルが急激に変化した戦後の食卓まで、和食の変容を見ていきます。



織田信長が徳川家康をもてなした本膳料理の再現
(模型：奥村彪生監修 御食国若狭おばま食文化館蔵)



「忘れられない和食」掲示風景
(宮城会場の様子)

第4章 わたしの和食

様々な変遷を経て、伝統的な和食のスタイルは確立します。一方、明治以降受け入れられ定着した、海外料理を起源とする日本の料理も数多く見られます。地域や世代によって思い描く和食はさまざまで、一概にまとめることはとても困難です。

この章では、来館者の皆さんの「忘れられない和食」を教えてください。

第5章 和食のこれから

科学・技術の発展はこれまで以上に私たちの食を豊かにしてくれる可能性を持っています。しかし、同時に、食を取り巻く環境はさまざまな課題を抱えています。

気象や災害、疫病、戦争、それに資源・エネルギー問題など、自然や社会の影響を受けながら、和食はこれからどのように変化していくのでしょうか。

本章では、和食を取り巻く現代の動きに関する展示を通じて、和食の未来を思い描きます。

この他にも、展示を構成する各章に沿って松本の食にまつわるさまざまなトピックスを紹介します。身近なようで意外と知らない「和食」の魅力を是非ご覧ください。

企画展「収藏品展 戸田家臣団—松本藩最後の武士団—」を終えて

1 はじめに

令和6年4月20日(土)～6月17日(月)に新館開館後初の収藏品展となる「収藏品展 戸田家臣団—松本藩最後の武士団—」を開催しました。当館自慢の資料とともに、150年以上にわたって松本藩を支え続けた藩主・戸田家とその家臣団の軌跡をたどる展示となりました。本稿では展示を終えた振り返りとして、展示資料の一部を紹介します。

2 展示紹介

(1) 資料整理と戸田家の武具

本展覧会では、新館への移転にともない実施された資料の再整理によって調査・研究に至った資料も多数展示しました。未整理だった資料の中には松本藩戸田家にかかわる具足や旗指物などの武具も多く、それらを使用した人々の身分やデザインの違いが示す意味については、戸田家やその家臣が残した軍事書をあたりました。

幕末、松本藩で軍学者をつとめた戸田家臣・友成家が所持していた「御家閑習」には、戸田家の軍隊規模や編成のほか、家臣たちが身に着ける武具についても図示されています。「御家閑習」によると武具の外観にはそれぞれ規定があり、身分や役職によってデザインや配色を変えていることが分かります。

収蔵庫移転による大規模な資料整理を通して、実物の資料と文献史料が紐づけられた展示につなげることができました。

(2) 安政4年の甲冑揃え

安政4年(1857)5月、松本城二の丸御殿で戸田家臣の諸士(上級武士)たちが自前の甲冑を着揃えて当時の藩主・戸田光則に謁見するという催しがありました。この甲冑揃えは、江戸幕府の情勢が不安定となる中、今後の戦闘に備えて武具を檢めるとともに、主君と家臣団の団結を確かめ合う機会でもあったと考えられます。史料「御家中具足毛色」には、甲冑揃えに参加した家臣が着用した甲冑の様子が兜・頬当・胴に分けて記録されています。今回の展示では「御家中具足毛色」の記録と特徴が一致する甲冑を取り上げました。

このうち、藩医であった堀内家の甲冑には、胴の裏側に甲冑製造の経緯が書かれています。甲冑揃えの前年に江戸の甲冑師・明珍家の高弟である須山作蔵が製作し、安政4年5月14日に甲冑揃えで着用したことも記されている、大変貴重な資料です。



戸田家臣・堀内家の甲冑(左)と裏書き(右)

3 おわりに

この展覧会の開催期間中に、市内外から江戸時代の松本藩にかかわる資料寄贈のご相談が急激に増えたことが印象深いです。その中には、戸田家臣のご子孫の方々もいらっしやり、「先祖伝来の家宝を公に活用してもらいたい」という話もいただきました。この展覧会が少しでも松本市の郷土資料・文化財保存への関心を高める一助となれば幸いです。

結びに、これまで当館に貴重な資料をご寄贈・ご寄託いただいた多くの方々と、本展覧会の開催に際して、ご助言・ご助力いただきました皆様並びに、関係各所に厚くお礼申し上げます。

(松本市立博物館 学芸員/吉澤 せり子)



戸田家臣・松崎家の旗指物(左)と「御家閑習」(部分・右)
写真の配色は、戦場で鉄砲隊や弓隊を指揮する「鉄砲弓頭」であることを示しています。

博物館資料から探る松本の音楽教育のルーツ

バイオリンの調べやセイジ・オザワ・松本フェスティバルに代表される「楽都・松本」。伝統的に音楽を愛する気風はどのように生まれ、街のイメージとして定着していったのでしょうか。今回、博物館の収蔵品の中から楽器を取り上げ、その背景を探ってみたいと思います。

1 旧山辺学校校舎に展示中の《足踏み式オルガン》

長野県宝「旧山辺学校校舎」には、1台の《足踏み式オルガン》が展示されています。明治31年(1891)に山辺尋常高等学校で購入した国産(ヤマハ製)のオルガンです。その仕組みは、足元にあるペダルを踏むことで、中



足踏み式オルガン

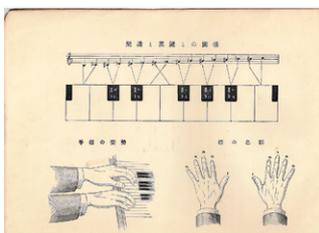
にある「ふいご」が広がり減圧し、鍵盤を押すことでバルブが開き、空気の流れでリードという薄い金属板が振動することにより、音が出ます。その音色はどこか懐かしく郷愁を誘います。

当時の庶民にとって音楽的なものといえば、わらべ歌やお祭りのお囃子や和太鼓。「正確に調律された楽器から奏でられる」オルガンの音色は、まさに文明開化そのものの体験だったのではないのでしょうか。オルガンを購入して西洋的な音楽教育を行おうとした学校の先見性がうかがえます。

2 全国に先駆けて行われた音楽教育「唱歌」



明治38年(1905) オルガン教科書



明治期の学校で西洋音楽は、松本でどのように受容されていったのでしょうか。

開智学校(旧松本尋常高等学校)では、明治16年(1883)から、すでに県師範学校の教師が来校してアメリカ製バイオリンで「唱歌」^[注1]を試みていました。そして明治20年(1887)暮れ、全国に先駆けて五十七円五十三銭でアメリカのメーソン・アンド・ハムリン社のオ

ルガンを購入したという記述が残されています【明治25年『唱歌沿革取調書』】。それは、辻新次や、伊澤修二(芸大初代学長、長野県伊那市高遠町)、神津専三郎など文部省における音楽教育の推進者たちが、長野県出身者であったことが要因の一つです。小学校への音楽導入はまだ試行段階にあり、松本はモデル校として選ばれたのです。松本での、このような音楽に対する断続的な実践が、早い段階でのオルガン導入につながったといえます。

3 なんと38番まである唱歌「山辺の里」!

学校における教科「音楽」は、まず「唱歌」という形で展開されました。歌詞には、地域の歴史、自然、風土、文化の特色が数多く織り込まれています。その特徴の一つは「知識習得の手段の一つとして、文章を覚えやすいメロディーに乗せて口ずさめる」ことといえます。

山辺の教育刷新に尽力した吉田頼吉は、明治37年(1904)に唱歌「山辺の里」を制定しています。38番まである長大な唱歌で、そこには山辺の地理、歴史、産業、名所、伝説等が歌い込まれています。子どもたちだけでなく、広く村民に愛され歌われていました。



オルガン披露の様子(西村真琴)

4 「楽都・松本」のルーツ

《足踏みオルガン》が、国産化に成功し広まっていった時期(ヤマハの創業者・山葉寅楠は明治30年(1897)10月12日に「日本楽器製造株式会社」を設立)と、広く全国的に小学校へ「唱歌」が科目として導入されていく時期とが重なっていることは、注目に値します。明治時代の西洋音楽の受容は、足踏み式オルガン(リードオルガン)の導入から始まったともいえそうです。音楽の街として多くの人に認識されている「楽都・松本」のルーツを、この楽器から垣間見ることができます。

(長野県宝旧山辺学校校舎 学芸員/大島 浩)

【注1】明治の学制以降昭和16年(1941)までの学校教育における音楽教育の教科名。

【参考文献】

『開校八十周年記念誌』昭和28年(里山辺教育委員会)
『オルガンの文化史』赤井励 平成18年(青弓社)

ミニミニ涅槃図

皆さんは「涅槃図」をご存じでしょうか。

涅槃図とは、お釈迦様の臨終の様子を描いた絵のことです。中央にお釈迦様が横たわり、その周りでは大勢の菩薩や弟子たちが悲しみに暮れ、人だけでなくさまざまな動物たちも集まり、お釈迦様の死を悼んでいる様子が描かれています。お釈迦様の命日である2月15日には、日本各地のお寺で「涅槃会」が営まれ、お堂に



涅槃図がかけられました。

涅槃図には大型のものも多く、京都・泉涌寺が所蔵する日本最大級の泉涌寺の涅槃図は縦15m以上もあるそうです。和田の西善寺が所蔵する松本市内で最大の涅槃図も、縦4.7m、横5.3mと、地方寺院の涅槃図としては最大級の大きさを誇ります。

ここで、当館が所蔵する涅槃図を紹介します。市民の方からご寄贈いただいた仏壇一式資料の中に含まれていました。

この涅槃図、なんと縦7.5cm、横12.5cmのミニミニサイズ涅槃図なのです！

年代や由来等は今のところ分かっていませんが、このサイズ感、そして巻かれていた形跡があることから、もしかしたら携帯用涅槃図として、懐に入れて持ち歩かれていたのかも？

大変小さな画面ですが、お釈迦様をはじめとするたくさんの人物や動物たち、そしてお釈迦様の死を悼む表情、仕草が見事に描かれています。

(松本市立博物館 学芸員／武井 成実)

企画展「今昔はかり展」どうやってはかるの？ この「はかり」

この数年開催した「今昔はかり展」では、ノギス・計算尺・手回し計算器など今では、はかり方が忘れ去られたはかり類を紹介してきました。

今回は竿秤を取り上げました。竿秤は珍しいものではありませんが、いざはかろうとすると、戸惑うかもしれません。初めに3つある取緒のどれを支点に使うのか選びます。次に選んだ取緒によって目盛の位置が決まっているので、その目盛をよむという手順になります。竿秤は大変便利で、多くの人々に使われてきた物ですが、一度手に取って体験してみないと、使い方はなかなか伝わらないかと思います。

今年度の企画展では、竿秤のはかり方の体験を中心に、今まで紹介したノギスなどのはかりも体験していただけますので、はかる楽しさを知るきっかけになるかもしれません。

11月3日の文化の日には、11月1日の計量記念日に合わせ、計量を楽しく身近に感じてもらうイベントをはかり資料館で開催します。



企画展「今昔はかり展」どうやってはかるの？ この「はかり」

[会 期] 10月30日(水)～12月26日(木)
午前9時～午後5時(入室は午後4時30分まで)

[会 場] 松本市はかり資料館

[料 金] 通常観覧料 (高校生以上 200 円・中学生以下無料)

(松本市はかり資料館 学芸員／遠山 順子)

古代のロマンに触れる ― 大人気の「化石教室」

1 はじめに

松本市四賀化石館では毎年「化石教室」という講座を開催しています。中でも特に人気の高い化石採集コースは、実際に発掘体験ができるため毎年多くの応募があり、松本市内はもちろん、市外や東京都などからも多くの応募が寄せられるほどの大人気講座です。今年度も定員160名のところ、約400名のご応募をいただきました。

2 化石採集コース

はるか昔、松本市四賀地区をはじめ、現在の長野県の多くの地域には海が広がっていました。四賀ではこの海に暮らしていたシガマッコウクジラなどの海生哺乳類の化石や、シガウスバハギなどの魚類の化石、貝化石などが豊富に見つかります。

化石採集コースでは、館内展示の解説から始まり、四賀地区でみられる地層や現地保存クジラ化石を巡るバスツアー、そしてメインイベントとなる化石の発掘体験を行っています。発掘体験では、魚類のウロコ化石や二枚貝化石が多く見付き、参加者はほぼ確実に化石を持ち帰ることができます。運が良ければ、魚類の骨の化石やサメの歯の化石が見つかることもあり、シガマッコウクジラ未発見部位の大発見の可能性ももちろんゼロではありません。

今年度の化石採集コースもすでに半分が終了し、参加者の皆様にたくさんの化石を見つけていただいています。親子連れやご家族での参加が多く、子どもたちは夢中で岩石を割り、化石を見つけると「先生!」と言って

見せに来てくれます。一方、親御さんとはいうと、お子さん以上に真剣に化石を探しています。化石には人々を惹きつける不思議な魅力があり、この世界には年齢を問わず夢中になれるロマンがたくさん詰まっていると思います。

3 レプリカ作りコース

大人気の化石教室には、「化石採集コース」のほかにも「レプリカ作りコース」があります。アンモナイトや三葉虫の型に石膏を流し入れて化石のレプリカを作り、自由に色を付けて完成させます。リアルなレプリカを作るもよし、ファンタジーな作品を作るもよし。世界に一つだけの作品を作ってみませんか？

4 おわりに

今年度の化石採集コースの参加者募集は4月で締め切らせていただきましたが、例年開催しておりますので、次回のご応募を心よりお待ちしております。また、レプリカ作りコースは10月9日(水)午前9時より参加申し込みを受け付ける予定です。その他イベントに関する情報などは、四賀化石館ホームページやSNS(X)、情報誌等にて随時発信してまいりますので、ぜひご確認ください。

それでは、四賀化石館にて皆様のご来館をお待ちしております。

※化石採集に関しまして、個人での採集はお控えいただきますようお願い申し上げます。



バスツアーの様子



見つかった化石たち

(松本市四賀化石館 学芸員/埴 東子)

展示スケジュール

詳細はホームページへ! <https://www.matsu-haku.com/>



館名称	10月	11月	12月
松本市立博物館	■特別展「和食～日本の自然、人々の知恵～」 10/5(土)～12/8(日)		
窪田空穂記念館 ※	■企画展「空穂と源氏物語—古典文学の世界」 9/6(金)～10/27(日)		
松本市歴史の里 ※	■建築講座「松本のたてももの2024」パネル展 9/14(土)～12/1(日)		
松本市はかり資料館 ※	■企画展「今昔はかり展」どうやってはかるの? この「はかり」 10/30(水)～12/26(水)		
旧制高等学校記念館	■企画展「松高生と松本のまち」 8/10(土)～12/22(日)		

※料金は通常観覧料、月曜休館(休日の場合は翌平日)

松本市立博物館から

☎0263-32-0133

特別展「和食—日本の自然、人々の知恵—」

会期 10月5日(土)～12月8日(日)
午前9時～午後5時(入室は午後4時30分まで)
会場 松本市立博物館2階特別展示室
閉室日 毎週火曜日
観覧料 特別展単独券 大人1,000円(800)
大学生600円(400) 高校生以下無料
常設展セット券 大人1,200円(1,000)
大学生800円(600) 高校生以下無料
※()内は20名以上の料金

特別展「和食—日本の自然、人々の知恵—」講演会① 「ヤマの和食、サトの和食—塩とタンパク質をどのように入手したのか—」

講師 佐藤洋一郎氏
(ふじのくに地球環境ミュージアム 館長/本展監修者)
日時 10月5日(土)午後1時30分～午後3時30分
会場 松本市立博物館 講堂
定員 80名 ※QRコードよりお申し込みください
料金 無料



特別展「和食—日本の自然、人々の知恵—」講演会② 「信州 松本の食の地を知り、味わう」

講師 中澤弥子氏(長野県立大学健康発達学部 教授)
日時 10月6日(日)午後1時30分～午後3時30分
会場 松本市立博物館 講堂
定員 80名 ※QRコードよりお申し込みください
料金 無料



特別展「和食—日本の自然、人々の知恵—」 ギャラリートーク

講師 松島憲一氏(信州大学農学部 教授)
日時 10月27日(日)午後1時30分～午後3時
会場 松本市立博物館2階特別展示室
料金 本展観覧料

窪田空穂記念館から

☎0263-48-3440

窪田空穂記念館企画展

「空穂と源氏物語—古典文学の世界」

歌人、窪田空穂は国文学者としても優れた研究を残していますが、その中から今話題の紫式部『源氏物語』をとりあげます。また、最新収蔵資料公開展も同時開催いたします。
会期 9月6日(金)～10月27日(日)
会場 窪田空穂記念館会議室
料金 通常観覧料(大人310円 中学生以下無料)
生家のみ観覧料無料

松本市歴史の里から

☎0263-47-4515

建築講座「松本のたてももの2024」

地元で活躍する建築士の方々と協働で、松本の伝統的な建物を紹介する講座です。

〈パネル展〉

「続・文化住宅と暮らし」をテーマに、松本市内に残る文化住宅を紹介します。

期間 9月14日(土)～12月1日(日)
会場 重要文化財旧松本区裁判所庁舎
料金 通常観覧料(大人410円 中学生以下無料)

〈座談会〉

「あこがれの文化住宅」をテーマに、市内で活躍する建築士の皆さんが、文化住宅の魅力や文化住宅を後世に遺していくことの意義などを語ります。

日時 9月16日(祝)午前10時～正午
会場 重要文化財旧松本区裁判所庁舎
定員 20名(先着順) ※お電話にてお申し込みください
料金 通常観覧料(大人410円 中学生以下無料)
講師 市内で活躍する建築士の皆さん

〈現地見学会〉

国宝旧開智学校校舎周辺の文化住宅を、建築士の皆さんによる解説を聞きながら巡るまち歩き講座です。

日時 10月14日(祝)午後1時30分～午後3時(予定)
集合場所 松本市旧司祭館前
※駐車場がありませんので、公共交通機関のご利用をお願いいたします。

見学場所 国宝旧開智学校校舎周辺
定員 15名(先着順) ※お電話にてお申し込みください
料金 無料
講師 市内で活躍する建築士の皆さん

あとがき

松本市立博物館には15もの分館があり、各館の学芸員が本誌の原稿に携わっています。編集作業をしていますと、さまざまな分野の専門的見地からの記事に驚かされると同時に、多くのご協力を得ながら本誌が成立していることを実感します。私自身も日々の勉強を欠かさないようにしていきたいです。
(松本市立博物館 竹藤 敏)

あなたと博物館 No.249

発行年月日/令和6年(2024)9月15日
編集・発行/松本市立博物館
〒390-0874 松本市大手3丁目2番21号
Tel.0263-32-0133
URL: <https://www.matsu-haku.com/>
e-mail: mcmuse@city.matsumoto.lg.jp
印刷 川越印刷株式会社



松本市立博物館
Matsumoto City Museum